国境を挟んだ二つの故郷

犬槙リサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
国境を挟んだ二つの故郷

【Ｎコード】
Ｎ０１９５Ｓ

【作者名】
犬槙リサ

【あらすじ】
１６世紀末。農家のヴィル爺さんとトゥルート婆さんは、犬のダーフィトと共にバイエルンの国境沿いの村で暮らしている。ある日、村の中心で火事が起きた。二人は村の教会へと逃げるが、そこで隣国の兵隊が攻めて来たことを知る。

1（前書き）

東日本大震災で被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。

被災地の皆さんに少しでも笑顔を取り戻していただこう、という企画「Ｓｍｉｌｅ　Ｊａｐａｎ」への参加小説です。

1

ところどころ継ぎをあてた長いスカートに、洗い晒しのエプロンを着けたトゥルート婆さんは、朝一番に牛を表に連れ出して皺だらけの手で乳を搾る。その間、枯れ木のようなヴィル爺さんは息を切らせながら、牛舎の干し草に貯まった汚れをかき出している。

新しく入れた干し草の上、牛よりも先に、大きな犬のダーフィトは薄汚れて灰色になった背中を擦り付け、ぼろぼろの毛並みを整えていた。

山からの風は今朝も冷たいが、小屋近くに赤紫色に咲き始めたばかりのアルペンローゼは夏の到来を告げている。

二人が朝食の支度を始めるのは、ひと働きをし終わってから。人の住む家と隣りの牛舎では、どちらか貧しいか分からないほど粗末な二階建ての家に入ると、犬のダーフィトも着いてくる。

ヴィル爺さんは近くの小川から汲んだ水で軽く手を洗い、ガタガタと揺れる古い木のテーブルに生成りの厚手生地に赤で花を刺繍したクロスを引いてから、青い花が描かれている皿を並べた。

トゥルート婆さんは台所から豚の血がたっぷり入ったソーセージを持ってくる。サワー種で作った酸っぱいライ麦パンを薄く切り、小さな穴がたくさん開いている固めのチーズを皿に乗せる。余った一枚の黒パンとチーズのかけらは、テーブルの下に潜り込んでいるダーフィトにやった。

最後に絞り立てのミルクを真鍮で出来た蔦模様のマグカップに注ぐと、この数十年の間、一日も欠かさなかった毎日の朝食が揃う。

「ヨーゼフが来るのは、今日だったかな？」

天井を見ながら思い出すようにヴィル爺さんが言うと、向かいに座るトゥルート婆さんは、

「そうですよ。今日こそリタに乳搾りをさせてあげようと言ったの

は、あなたじゃありませんか」と笑いながら答えた。
この老夫婦に子供はいなかったが、養い子のヨーゼフは時おり娘と一緒に山を登ってくる。この山間の小さな村で作る塩を、南の大きな街へと運ぶためだ。
ヨーゼフがまだ何の手伝いも出来ないリタを連れて来るのは、養い親を少しでも喜ばそうとしてのこと。老いた二人にとっては、何よりの楽しみである。
「ヨーゼフのお商売は、順調なんでしょうか」
今度はトゥルート婆さんが心配そうに口にした。食卓からそっと手を下ろすと、テーブルの下から大きなダーフィトが見上げて指先を舐めてくる。
「いつ戦争が始まるかと、街の人たちも心配してるだろ。田舎のチーズどころじゃないかもしれん。ヨーゼフは……確かに行き帰りの街道も心配だがな。何かあったら、それより先に、儂らの方が逃げ出す事になるぞ」
ヨーゼフが登って来るアルペンの道を、そのまま進んで反対側に降りてしまえば、そこはもう隣国のはずれ町となる。最近では、二つの国がいがみ合っているので、ヨーゼフは妻と子を連れて、国境沿いに一本杉がそびえるハイデンライヒ村を離れてしまった。
「もう、何度目でしょうかね。戦争は」
ヴィル爺さんとトゥルート婆さんが一緒に暮らしはじめてから、四十年ほど経つ。
その間にも、戦争まではいかないものの国同士の諍いは何度もあった。このバイエルンの山奥で産出されるアルペンザルツと呼ばれる塩をめぐっては、遥か昔から幾度となく争いが繰り返されて来た。
だが幸いなことに、この村は一度として戦火に巻き込まれることはなかったので、二人は牛を育てながら、ずっとこの地で暮らしている。
「あちらの方が、儂らよりずっと良い生活をしてると思うんだがな」
ヴィル爺さんは、隣国の町の中央にある噴水、小麦の白いパンや

口当たりの良いワイン、刺繍をふんだんに施した美しい女性の服、木で出来た色とりどりのおもちゃなど、遥か昔の記憶を頭から引っ張り出すように思い浮かべた。

確かに、あちらのアルペンザルツは掘りつくされ、もう出なくなってしまったと聞いている。しかし、塩気ばかりで作物の育たないこの国に比べれば、農業の盛んな隣国は遥かに豊かなはずだ。

それなのに何故、こんな貧しい土地を狙って来るのか、ヴィル爺さんには分からない。

だが、分からないのは自分は歳を取りすぎて、もう何も欲しくなくなったせいかもしれない。若いうちは何でも手に入れたがる。それはヴィル爺さんだって嫌と言うほど知っている。人は一番強く欲するものを、自分の人生で最も重要なのだと錯覚するのだが、それも僅かな間でしかない事を、ヴィル爺さんは知っている。

いずれ狂おしい熱は冷め、時とともに、なぜ求めたか不思議と分からなくなるものだ、と思った。

まだミルクの残った真鍮のマグカップを足元まで下ろすと、テーブル下のダーフィトがすぐに寄って来た。目が合ったトゥルート婆さんは、にっこりと微笑んでくる。

この四十年、二人は貧しい暮らしを送ってきた。まだ随分と若かった頃、二人は裕福さよりも、熱に浮かされたように愛のある暮らしを求めたからだ。愚かだったとは思うが、不思議と後悔は無い。ヴィル爺さんは食事の終わったテーブルからクロスを外し、トゥルート婆さんは皿の片付けを始めた。

2

午後になってすぐ、ヴィル爺さんは村長の家まで急いでバターを届けに行った。もうそろそろ、ヨーゼフとリタがやって来る頃だ。
トゥルート婆さんは待ちかねて夕食を作りはじめている。小麦粉のすいとんに、たっぷりとチーズを入れたケーゼシュペッツレは、小さなリタの好物で、いつも二杯も平らげてしまうのだ。
ヴィル爺さんは美味しそうな匂いを気にしつつ、豆入りの飼料を作りに牛舎へと向かった。
すると、いつもなら呑気に干し草を食べているはずの牛たちが、落ち着き無くうろうろとしている。顔つきもいつもより荒々しいようで、歯を見せ鼻息を荒げながら、後ろ足で草を蹴っている。
ダーフィトは、いつもならバウバウと吠えるだけで大人しくなるはずの牛たちが、今や自分よりも大きな暴れん坊になったことを知り、焦ったように牛舎の入り口でうろうろとしている。
やがて、ダーフィトは何かに気づいたように村の中心に向かって吠え出した。ヴィル爺さんも慌てて牛舎の外に出る。それと同時に村はずれの教会の鐘が、鳴るはずの無いこの時間にカーンカーンと激しく響きはじめた。ダーフィトは牙を剥いて狂ったように吠え続けている。
「トゥルート、トゥルート。大変だ、村長さんの家の方から煙が上がってるぞ」
家に向かって大声で言うと、トゥルート婆さんは、
「あら、それは大変。火事かしら」と、ケーゼシュペッツレの鍋を抱えて飛び出して来た。手には鍋つかみを付けたままだ。
ヴィル爺さんは、手近にあった水桶や絞ったミルクを入れた大きな缶を家の前と牛舎の入り口に転がすと、辺りは水浸しとなった。
急いで胸の前で十字を切り、
「聖バルバラ、麗しき乙女よ、火事より我らを守り給え」と多くの

言葉を省きながらも、火から人々を守る聖女バルバラに祈りを捧げ、教会へと向かう。
聖人への祈りなど何十年ぶりだろうか。トゥルート婆さんの故郷であるこのハイデンライヒでは、新教〈プロテスタント〉の教えを守り、神の前では全ての人が平等でなければならないと説く。
だからこそ、聖人を特別視しないのだ。結婚前まではカトリック教徒であったヴィル爺さんも、それで良いと思って来た。平和な生活に聖人など不要である。
しかし、煙が上がっている今になって火事除けの聖人にすがるなど、自分はなんと身勝手だろうと心の奥で呟く。
街道とは逆に教会へと向かう草むらの道を、二人の前を先導するようにダーフィトが走っていった。

カーンカーンと、教会の音はまだ鳴り響いている。村の中央からは灰色の煙が立ち上っていた。
皆、村はずれの教会を目指しているに違いない。ざわめきが聞こえてくる。老人たちや若い母親も、小さな子どもたちを連れて走って来た。人々の中に村の若い男たちは見当たらないのだが、火事を消しに行ったのだろうか。
考えながら進むうち、すぐ後ろで、はあはあと荒い息が聞こえて来たので、振り返れば、トゥルート婆さんが道に座り込んでしまったのが目に入った。
「少し、休むかい？」
そう言いながらもヴィル爺さんは笑いを堪えている。トゥルート婆さんは、先ほどまで作っていたケーゼシュペッツレの鍋を抱えたまま、逃げて来たのだ。
「それは置いて行ったらどうだ？」
「そうですねえ。でも、持って来てしまったんですから、このままでいいんじゃありません？　教会には、家を失った人が、お腹をすかせて待っているかもしれませんよ」

あっけらかんと言うものだから「なるほど」と、相づちを打つヴィル爺さんは、幾つになっても女性は逞しいのだと感心した。
笑いながらも、さあ、行こうと話していると、少し前を走っていたダーフィトが尻尾を下げて戻って来る。あまりに遅いので心配になったらしい。
「あらあら。大丈夫ですよ、ダーフィト。早く教会に行きましょう」
頭を三度も撫でられて気を良くしたダーフィトは、再び尻尾を立ててから、また走り出した。

3

教会前の広場に立つ、大きな一本杉が見えて来た。荒っぽい石造りの小さな教会は、少々のことではびくともしないはずだ。

簡素な石造りの悩みと言えば、集会の間も壁の隙間から風が入って来るくらいなこと。それに、近くには溜め池もあるので火事を避けるには最適でもあった。

教会の中には既に十人ほどの人影があり、牧師とともに皆が祈りを捧げている。

ここは村の中心から離れているので、もう安心と口にしながらもヴィル爺さんは、心では残して来た牛たちを、それよりも間もなくやって来るはずのヨーゼフとリタを気にかけていた。

二人は教会の中央に掲げられた、なんの飾りも無い木の十字架に向かって祈り続ける。ダーフィトも教会椅子に座る二人の足元にに寄り添ってきた。心配そうにトゥルート婆さんを見上げ、靴先をペロペロと舐めながら。

バタンという大きな音の後、倒れ込みそうな勢いでやって来る足音が近づいて来た。

入り口の方を振り返ると開け放たれた扉の向こうから、息を切らせた若者が入って来るのが見えた。

「おい、みんな。逃げろ、兵隊が攻めて来たんだ。村の中心も街道も、見つかった奴らはみんな殺されちまった」

この騒ぎが火事でないことを知り、驚いたトゥルート婆さんは立ちあがろうとしたが、体は言うことをきかないようで、またすぐに座り込み、ぶるぶると震えている。

「街道……街道。リタ……ヨーゼフ」

それからずっとリタとヨーゼフの名を呼び続けるだけで、もう教会の外に出ようとはしなかった。

「もうすぐ、ここにもやって来るのか？」
先ほどの若者は、何も言わずに頷いた。さあ、と手を差しだして教会の中に居る人々を連れ出そうとしている。
ヴィル爺さんは悩んだ。このまま若者と一緒に逃げ出すべきか、最後の瞬間まで神に祈りを捧げるべきか。
だが、考えるだけ無駄かもしれない。どのみち、トゥルート婆さんはここから動けそうにないのだから。
教会を出る人たちを見送ってから、ヴィル爺さんと牧師は扉に鍵を閉じ、大きなかんぬきをかけた。このまま兵がやって来なければいい、と牧師は主に祈る。だが、教会に兵が来ないと言うことは、別の場所にいる人たちが災いに遭っているということではないか。
教会椅子に座るトゥルート婆さんは、ヨーゼフとリタの無事をひたすら願った。
ヴィル爺さんは、火と戦争から人を守る聖バルバラへの祈りを声に出さずに続けている。手には季節外れの火かき棒があったが、体は枯れ木のように痩せ細り、上手く振り回せるか心配になる。これが役に立つかどうかさえ、分からなかった。
他にと言えば、大きな汚れた犬が一匹だ。たったこれだけで、トゥルート婆さんと牧師をいつまでも守れる自信はなかったが、やらなければならないと言うことだけは承知しているのだ。

ふと、ヴィル爺さんは火かき棒を握る手に、大昔のことを思い出した。かつて、自分が兵士であったことを。
しかも、あちら側の軍にである。今、この村を攻めて来る隣国の軍隊に自分はいたのだと記憶は語っていた。しかし何故、今まですっかりと忘れていたのだろうか。
古い思い出とともに、美しかった若かりし頃のトゥルート婆さんまでもが目に浮かんで来た。
輝くような金髪に真っ白な肌、ふっくらとした桃色の唇の少女が「ヴィル……ヴィル…ヘル…」と呼んでいる。今や思い出すのも困

難な昔のこと、若かったヴィル爺さんは少女との暮らしを求めて隣国からやって来た。
アルペンの野原に一面の花が咲く初夏、村はずれのこの教会で式を挙げたときの、少女の頃のトゥルート婆さんが嬉しそうに微笑んだのが懐かしい。家畜の飼い方などまるで分からなかったが、牛の糞尿にまみれながらも少しずつ覚えていった。思わず、懐かしさに涙が溢れそうになる。
ヴィル爺さんは何故こんな時に思い出すのか、とも考える。
ああ、人は最後に自分の人生を振り返ると言うのは本当なのだなあと感じ、ほんの少しだけ、笑いが込み上げてきた。

しかし、穏やかな思い出は、突然、外からの恐ろしい絶叫にかき消された。
大勢の足音とともに、ガチャガチャと金属の擦れ合う音や男の笑い声が聞こえてくる。短い悲鳴が何度も上がった。何が起こったのかは分からない。だが、外でなんらかの惨状が起きたと言うことだけは想像出来る。
ヴィル爺さんは、思わず目を閉じた。しばらくの間、叫びや笑い、様々な音が聞こえて来たが、最後に歓声が上がった。
しばらくすると、教会の中が段々と熱を帯びてきたような気がする。
「リタ……、ヨーゼフ……」
トゥルート婆さんは祈り続けている。ダーフィトは扉の前にやって来て、今にも飛び出そうと待っていた。その後ろでヴィル爺さんが火かき棒を握る。間もなく、大きな音とともに扉が激しく震えた。
しばらくの沈黙があったが、今度はもっと大きな音がして、扉のかんぬきが折れてしまった。向こうから、ゆっくりと扉は開かれる。
そこに見たのは何人かの兵士の影と、教会前の広場に立つ一本杉が真っ赤になって炎をまといながら燃える様だった。
兵士たちは何か喋っているようだったが、ヴィル爺さんには何も

聞こえない。ただ、手にした火かき棒を剣のように構えるだけだ。

司祭壇の目の前、祈り続けるトゥルート婆さんの隣りに置かれたケーゼシュペッツレの鍋は、冷えて固まりながらも、まだチーズの匂いを放っていた。

4

どこからか声がする。何度も名を呼ばれているようだ。
「どうかなさいましたか？」
ヴィルヘルムは額に手を当て、目眩をこらえた。心配そうに声をかけてくる書記官に、「気にせず続けてくれ」と指示をする。
ほんの一瞬、自分がどこにいるか分からなくなったような気がしていた。
目頭を押さえる指に力を入れ、何度か瞬きをしてからゆっくりと目を開けたが、やはりここは二階の執務室であることに間違いない。城の石造りの窓からは夕焼けが差し込んでいる。
自分が座る事務机の上には幾つかの書類が見える。その隣にも、やや小さめの事務机があって、そこには先ほど声をかけて来た書記官のヨーゼフが大きな分厚い帳面に何か書きながら座っていた。
小柄な書記官が書き留めているのは、目の前にいる客人との会話だろう。
灰色の法衣を着た、ほとんどが白髪となって、残りわずかな黒髪さえも灰色に見えるような髪を持つ初老の司祭が、
「ご調子が優れないのでは？」と聞いて来た。
ヴィルヘルムはゆっくりとあたりを見渡した。部屋の様子は、先ほどから何一つ変わっていない。
机の上だけでなく、壁にかけられた亡き父の肖像画も、先祖が武勲をたててバイエルン大公から賜った白と水色のバイエルンの大きな旗がかけられている。窓の外の夕焼けも、そこから入ってくる城の中庭で楽しげに話す人々の声も、記憶と何一つ変わらないのだ。
ヴィルヘルムは司祭と話す間のほんの一瞬、まばたきをしただけなのだが、それでも何か長い人生を夢に見たような、とてつもない時間が過ぎてしまったように感じている。だが、これは眩暈に過ぎないのだと心に何度も言い聞かせた。

ヴィルヘルムが何も言わずに片手を揚げて気遣いは不要だと伝えると、司祭もまた軽く頷いて了承の意を見せる。
「大司教がおっしゃるには、ハイデンライヒの領民はルター派〈プロテスタント〉とは言え元は同じ民族なのです。無理に兵を挙げる必要は、無いのではありませんか」
今、この場にヨーゼフしか居ないのであれば、ヴィルヘルムは盛大に文句を言ったことだろう。
ケルンの大聖堂から使者が来る前に、なぜ挙兵しなかったのか。南ドイツ、アルペン山脈の初夏は天候が変わりやすく、出立が伸びていたのが悔やまれる。
「もし、軍隊による宗教への介入が行われたとして」
司祭は言葉を切って、ヴィルヘルムを見つめた。
「ケルンは、新教徒であるゲルトルート姫との婚姻を認めることは出来ないのです」
前の戦争で、バイエルン出身のカトリック司教がケルンの司教君主になってからと言うもの、ケルンの決定はドイツ系カトリック教会そのものの意志とみなされる。
厄介な相手に捕まった、とヴィルヘルムは思った。使者であるこの司祭が来る前に、この城を出ていたのなら、もう間もなくハイデンライヒの姫を手にしたことだろう。
だが、こうして司祭は来訪し、武力介入と略奪婚を認めないと言うのである。
それならば一体、大司教はヴィルヘルムに使者を送ってまで何をさせるつもりなのか。司祭は言った。
「これまでに神聖ローマの多くの血が流されました。もうこれ以上の争いは必要ありません。ハイデンライヒの民がまやかしの教えに目が眩んでしまったのは、貧しさ故ではありませんか」
「それはつまり……、物資と引き換えにハイデンライヒに改宗させろ、と？」
ヴィルヘルムの問いに、書記官のヨーゼフは小さな溜め息をつい

た。
この城では今朝まで挙兵のための準備を重ねて来たのだ。兵のための食料はあっても、それ以上はまったく用意がない。
これからの調達がどれほど面倒かを思うと、戦争を起こして略奪してくる方がいかに効率的であるか、と嘆くしか無い。
「カトリック同士の婚礼は、誰もが祝福すべき喜ばしい出来事です」
ヴィルヘルムは落胆の溜め息を吐いてから、幼い頃から良く知るゲルトルート姫を思い浮かべた。
輝くような金髪に真っ白な肌、ふっくらとした桃色の唇が、「ヴィルヘルム」と呼ぶ。
アルペンの山を超えた国に、ゲルトルート〈槍の名手〉と呼ばれる少女がいた。姫君に戦乙女〈ヴァルキューレ〉の名を付けるのは、カトリックの教えよりも古くから続く伝統である。
しかし、穏やかな性格の少女は自分の名前から武器を外し、愛称のトゥルート〈しっかり者〉を名乗っていたではないか。
「承知した。わたしは飢餓に苦しむハイデンライヒ公の民に、出来る限りの食料を届けよう」と、司祭への返答を口にする。
思いどおりの答えに、ほっとした表情で何度も頷く司祭を見ながら、昔の記憶を辿って行く。
そう言えば、ヴィルヘルムもまた、ゲルトルートの前では名前から兜を外し、「ヴィル〈意志〉でいいよ」と答えたことを思い出した。
「ルター派の口だけの教義に騙されて、同じ民族同士で争うのは嘆かわしいこと。このバイエルン地方のように正しいカトリックの教えがドイツ全土に戻ることを、我々は祈っているのです」
人当たりだけは良さそうな司祭の社交辞令に辟易しながらも、ヴィルヘルムは十字を切って頭を下げ、聖職者への敬意を表す。
すると司祭は大きな笑みを浮かべながら、
「卿よ、貴方に聖バルバラの加護がありますように」と言った。
稲妻と火を守る聖バルバラは、軍事の守護聖人にして、小麦の豊

作を占う聖処女でもあるからだ。

5

夜になると、城の大広間には地下の大きな台所から料理が運ばれてきた。

チーズの良い香りがすると、部屋の誰もが鼻の奥まで匂いを吸い込み、手にしたナイフとフォークで食卓を叩きながら目の前に並ぶのを待っている。

丸まると太った飯炊き女のリタが作るケーゼシュペッツレ、チーズ味の小麦すいとんは、城の誰からも愛されて皆がぺろりと二杯も食べる。だから料理人や飯炊き女たちは、大鍋一杯に作らなければならなかった。

他にも、兎や豚のローストや鱒のムニエルが次々に食卓へと並べられて行く。

ヴィルヘルムは城の者たちと皆で食事をとりながら、中央の長テーブルで司祭と話し込んでいた。

「これは、なかなか」と、実に美味そうにバイエルンの料理を口にする司祭に、ヴィルヘルムの領地で作られた葡萄酒を勧める。

ピューター〈錫〉で出来た蔦模様のゴブレットには、カトリックにとってキリストの血を意味する赤ワインが幾度となく注がれた。

夕食が始まる前から杯を傾けていたせいか、ヴィルヘルムも司祭も、後ろで控える書記官のヨーゼフでさえも既に赤ら顔となっている。

この大広間には剣を差した騎士階級の者もいるし、身分を持たない兵もいる。

こうして皆が揃って大広間で食事をとるのだが、上下の差と言えば、座る長テーブルが違う程度のことで、食べる物も皆同じ。何か立派なことをして褒め讃えられるときだけは、豚の丸焼きを一番にとりわけて、低い階級の者でも最も美味な部分を食べる事ができる。

そして、どのテーブルの下にも、腹を空かせた犬が骨を投げてく

れるのを息を切らせて楽しみに待っていた。
もし、ここが先進国のミラノやベネツィアであったなら、細かいテーブルマナーも存在しただろう。
大小の国の領主が集まった連邦国家のバイエルン大公国の山奥では、犬が食卓にのぼる事はあっても狼を食べれば魔女として殺されたりと、古いだけの習慣が数多く残っている。
「やはり、この国は豊かですな」
上機嫌な司祭は、酒が進むうちに言葉も随分と砕けたものとなっていた。もう食べきれない、と言った風にフォークで皿をつつきながら、ヴィルヘルムに言う。
「作物の穫れないハイデンライヒの民も、こんな素晴らしい食事が出来るようになれば良いですなあ」と。
何が素晴らしいものか、とヴィルヘルムは心の内で毒づいた。
この食事が済めばテーブルは部屋の端に山のように積まれ、壁中にかけられた織物〈タペストリー〉だけでは防げない隙間風を遮るための道具となる。そして王侯貴族以外の騎士も、兵士も、調理人や飯炊き女さえも、皆で床に雑魚寝をするのだ。
だからこそ同じ国の者同士は仲間意識が強く、逆に言えば、殺しや略奪をするためには相手は他国の者でなければならなかった。
この城の民は隣国の塩を奪い、宝を奪うはずだった。この城の領主は、隣国の姫君を略奪するはずだった。
それを先にケルンの大司教に止められたのだから、今さら出来ることと言えば、腹いせの宴くらいなものである。

司祭は真っ赤な顔で食事の席から立ちあがった。途端、ふらふらと足元が崩れる。隣りにいたヨーゼフが「大丈夫ですか」と支えた。
司祭は上機嫌で大きな声で笑いながら、何度も楽しそうに支えとなっているヨーゼフの肩を叩く。これが聖職者かと呆れながらも見ていると、飲み続けるうちに尿意を催してきたのか、
「少し、外の風に当たって来ましょうかな」と、人けの無い方へと、

ふらふらと歩いて行った。
昔からドイツでは、男七人が宴席に着けば、殺人が起こっても主を責めてはいけない、とあるように、宴会とは実に物騒なものである。
あちらこちらで肉を切るナイフを木のテーブルに突き立てる音が聞こえた。食卓を去る男たちとともに、食事を運んで来た少しとうが立った女性たちも、一人また一人と数を減らしている。
戦争を止めた司祭本人が一人で城を歩きまわるのはまずかろうと、ヴィルヘルムは顎でヨーゼフを促した。
それから、危険などまるで分からない酔いどれを押し付けられて、嫌そうな顔をするヨーゼフを、一瞬、自分の方へと引っ張った。
その耳元に口をを近づけて、密かに言う。
「ヨーゼフ、わたしはどうも忘れっぽいらしい。あの司祭の名前は、なんだったかな？」
すると、今日、幾度聞いたか分からない溜め息が漏れた。
「おや。ヴィルヘルム様は、名前も知らない相手と協定を結ぶのですか？　なんと奇特な……」
少しばかり腹を立てたヴィルヘルムは、小柄なヨーゼフの胸を突き飛ばし、司祭の後を追わせようとする。すると、はじき出されたようにふらふらとするヨーゼフは、振り返ると、
「あの司祭の名前は、ダーフィトですよ」と叫んでから、小走りに駆けて行った。
ヴィルヘルムは、白髪と黒髪が混じって灰色に見える司祭の髪と、夢で見かけた汚らしい大きな犬を交互に思い浮かべ、「なるほど」と、誰にも聞こえないほど小さな声で呟いた。
それから、一人で酒を進めるうちに何もかもが面倒になって来た。勢い込んで隣国に攻め入って、美しいゲルトルートを戦利品とするはずが、明日からは何を楽しみにすればいいのだろう。
確かに、今朝までは戦を起こすことに夢中だった。だが今は、何故かハイデンライヒの民の首を切ることに抵抗を感じている。

おまけに忌々しいことだが、灰色のダーフィト司祭が先ほど口にした言葉は、酔いのまわったヴィルヘルムの頭の上で何度も繰り返されている気がした。

「卿よ、ゲルトルート姫の心を掴むのは剣ではありませんぞ。なんなら、このわたくしが恋文の手ほどきでもいたしましょうか？」

腕になら自信はあるが、女心など分かるはずもない。

これが名も無い農夫なら牛の世話をするだけで心が通じるものを、と舌打ちをしてから、ヴィルヘルムはゴブレットに残ったワインを飲みほした。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0195s/

国境を挟んだ二つの故郷

2011年5月13日21時55分発行